
瞳、桜、愛

砂漠の砂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瞳、桜、愛

【Nコード】

N2554L

【作者名】

砂漠の砂

【あらすじ】

幼稚園の頃夜空に見た瞳。それと同じような光景を油絵で描いた高校の同級生。

（前書き）

ゴールデンウィーク中、一日一作品書くと決めてこれで四作目です。
やっぱりきつかったか……。楽しんで読んでいただけると幸いです。

「お父さん、あれ、なあに」

五十嵐進は、家の窓から夜空を見上げていた。そして小さな異変に気がついた。

父も空を見上げた。そして、驚いた。

南の空に、月と同じぐらいの大きさの、糸くずのようなものが光っていたのだ。

「あれ、お星様？」

「いいや、あんな星はないぞ。雷の一種か？ スパークしているようにも見えるな」

二人は、三十秒ほど呆然と空を見上げていたが、やがてそれは消えた。

「消えたな……」

父はそう言った。

「目、じゃなかった？ 今の？」

「目？ そんなふうには見えなかったがな」

父は否定した。だが、五十嵐進の目には、光が消える瞬間、その絡まった糸くずの中心に、眼球があるのが映っていた。

五十嵐はすごいものを見たと思って興奮していたが、「明日も幼稚園でしょ、早く寝なさい！」

と、何も知らない母親に怒られて、渋々布団をかぶった。すぐに眠ってしまった。夢は見なかった。

翌日の朝、皆で朝食と取っている時に、父が昨日のことを話題に出さないのを訝しんで、自分からそれを口にしてみた。

だが、不思議なことに父は、何も憶えていないふうだった。とぼけているのかと思い、半ばかんしゃくを起こして騒ぎ立てたのだが、それでも父は知らない、というだけだった。

だから五十嵐は、自分の記憶違いかな、そう言えばいつもひらが

なの書き取りだってよく間違えるし、これも僕の間違いなのだな、そう自分を信じ込ませることにした。

その夜のことは、高校生になった今まで、両親以外の誰にも話していない。

だが、最後に見たあの丸い眼球の記憶、それが風化することは決してなかった。

「大きな瞳が、空から見下ろしているように感じることで、時々ない？」

だから、同級生で同じ美術部員の神楽坂涼子がそう言った時、五十嵐は自分の脳みそと彼女の脳みそが即座にリンクしてしまった様な気がした。

その時、幾人かの部員で放課後、油絵を描いていたのだった。神楽坂が現代都市のビル群の上に小さな瞳が浮かんでいる絵を描いているのを見て、一人の部員が「おっ、シュルレアリスムかな？」とからかったのに対して「うーん、私は別にシュールな絵を描こうと思っているんじゃないんだけどな」と返したセリフの後で、先ほどの一言をつけ加えたのだった。

「俺は、それ、分かる気がするな」

五十嵐は冗談半分でそう言った。

「やっぱり、分かる？」

「ああ。何となくだけだね」

だが、五十嵐はあの幼稚園の時の経験を語る勇氣はなかった。頭のおかしな奴だと思われたくはなかったのだ。

「なんて言うか、わたしは、この世界がね、実験室にある大きな水槽みたいなものなんじゃないかって感じるよ。それで、わたし達はそこを泳ぎ回る微生物。それで、研究者がわたし達を観察して、おもしろがってる」

「研究者？ それは、神様ってことか？」

五十嵐は思っただまを口にした。

「五十嵐君、鋭いわね。そう、それは神様に近い能力を持った奴。でも、神様じゃない。多分、本当の神様は、姿を現さない」

五十嵐は神楽坂が何を言いたいのか、完全には理解できなかった。だが、五十嵐と神楽坂は急速に仲良くなり、春休みに入る直前、五十嵐は神楽坂に告白した。

そして、春休みに入った今、二人はたくさんの計画を実行することができないまま、大学付属病院の病室にいた。

神楽坂は幼い頃からずっと原因不明の難病にかかっていたのだ。今まではそれほど症状が出なかったために友達にも隠してきたが、ついに大きな発作に見舞われ、入院せざるを得なくなったのだ。一週間ほど前のことである。

病室にはほとんど色がなかった。だから、神楽坂の肌の色が余計に目立って見え、それは神楽坂が生きている証だと、でもそれもだんだん薄くなつていつてしまうのではないかと、五十嵐は恐怖した。

「少し、痩せたんじゃないのか？」

病室内に停滞した気まずい沈黙を破るために、五十嵐はやっと言葉を見つけた。

「うーん、そうかなあ。全然運動しないから筋肉は落ちちゃうし、病院食はカロリー低いから脂肪もつかないし、それでかな」

「そうか」

再び、気まずい沈黙。五十嵐はまずいことを聞いてしまったと、慌てる。

「そ、そう言えばそろそろ桜が咲く季節だな！ その窓からも、窟神社に植えてある、桜の木が見えるんじゃないか」

そう言ってから五十嵐は後悔した。桜、さくらは必ず散るじゃないか、はかない人の命の象徴だつて昔から言われているじゃないか。なんてことを口にしてしまったんだ！

「そうね。でも、窟神社に植えてある桜の木はソメイヨシノじゃないみたい。咲くのは、四月の終わり頃らしいよ。母親から聞いたけ

ど」

だが、五十嵐の心の中で何が起っているのか神楽坂が気がつくわけもなく、彼女は普通に返した。

「……、そう言えば、桜の季節の窟神社って一度も行ったことがないな」

「でしょう。地元のことって案外知らないものなのよね」

「本当だな」

五十嵐は神楽坂の笑顔に安心した。

「桜といえばさあ、うちの学校にも一本、古い桜の木があるの知っているでしょう。あれはソメイヨシノだけど」

「ああ。いつも綺麗に咲くよな！」

「あれさあ、伝説があるの知ってる？ 自分の血を、あの木の根元に垂らして、心の中で願い事を唱えるんだって。そうすると、願いが必ず叶うって」

神楽坂は五十嵐を真正面から見つめて話した。だが、その目は五十嵐の身体も病院の壁も突き抜けてどこか遠くを眺めているように思えた。

「ああ、あれ。確か桜が満開の時じゃないと駄目だって話しじゃなかったっけ？」

「一年ぐらい前から、いつでもいいってことになってるんだよ」

「そうなのか。でも、木の根元に血を垂らすなんて、不気味だよな」

「そのぐらいしないと、桜の木の精も願いを聞き届けてくれないんじゃない？ それでね、わたし、去年の夏に、実際にやってみたのよ」

「本当か？ 神楽坂、お前そんなにロマンチストだったか？ 学校

で話していた感じじゃあ、リアリストに見えたけどな」

「女の子の心の中には、甘い幻想と、リアイズムが矛盾なく共存してるのよ。憶えておきなさい」

「はいはい。で、実際に血を垂らしたんだな？」

「うん。それで一心に願い事を唱えた」

「願い事は叶ったのか？」

「叶ったよ」

「どんな願い事だったんだ」

「分からない？」

彼女は、上目遣いに五十嵐を見た。

「なんだ」

「五十嵐君が、わたしのことを好きになっくれますように、って」

五十嵐は、顔がかつと赤くなるのを感じた。神楽坂が恥ずかしそうに目をそらしたので、余計に顔が熱くなった。

「……、そうか、良かったな」

五十嵐はがっくりと肩を落とし、うつむいた。

「わたしねえ、前世は桜の木だったんだ」

その一言は、五十嵐をひやりとさせるのに十分だった。

「何だって？」

「それで、人間とは全然ちがう仕方で、世界を見つめていた。その記憶がね、時々甦るんだ」

神楽坂の目は、もう五十嵐を見ていなかった。それは、中空をさまよっていた。

「おい、だ……」

大丈夫かという言葉が口をつきそうだったが、何とか思いとどまった。

彼女の病状は、そんなふうに見え隠れさせてしまふほど重いものなのか？

無性に怒りがこみ上げてくる。それが何に対しての怒りなのか、五十嵐自身にも分からなかったが。

面会の時間が終わり、五十嵐は病室を去った。

桜の木に願いを掛けたのが去年の夏だったとすれば、御利益はやっぱりないと言えるだろう。少なくとも、彼女の願いが叶ったのを、御利益がある根拠にはできない。

なぜなら、その時にはもう、彼は彼女のことを好きだったのだから。

ら。

だが、それでも。何かあるとすれば……。

五十嵐は携帯の電話帳から曾倉の名前を探した。

「曾倉遼」

あいつ、遼って名前だったのか。

入学したての時に電話番号を交換しただけで、一度もかけたことはない。正直、数えるほどしか話したことのない奴だが……。

「はい。曾倉ですが？」

思ったより低い声だった。

「夜遅くにすいません。五十嵐ですが」

「珍しいな。君が電話してくるなんて。初めてじゃないか？」

「ああ、多分初めて」

「ふむん。それで、何の用かね？」

「突然なんだけどさあ。曾倉君、妖怪とか、神話とかに詳しいじゃん。なんて言うんだっけ、そういうの」

「民俗学とか、文化人類学のことかね？」

「そうそれ。学校の怪談とか、ジンクスとかおまじないも、そういうジャンルの中に入るよな」

「そうだな。色々研究されている」

「じゃあさ。校庭に生えている、桜の木のおまじない、知ってるか？」

「ああ。根元に血を垂らして、願いを念じれば必ず叶う、というやつかね」

「知ってるか！　じゃあ、曾倉君、それについて調べたことはある？」

「一応、民俗学を志すものとして気になってはいたからね。それに文献を当たりもした」

「じゃあ、そのおまじないの正式なやり方を教えてくれないか？」
「なぜだね？」

「どうしてもかなえたい願いがあるんだよ！」

五十嵐はつい怒鳴ってしまった。それに対して、電話の向こうはしばらく無言だった。

「どうも、その声の調子からすると、よほど差し迫ったことのようなのだが……」

「ああ」

「だがね。わたしもこんなことを言えた義理じゃないが、おまじないなんてものに安易に頼るべきじゃない。自分が努力すれば解決できることなら、そうするべきなんだ」

「そんなことは分かっている。でも、どうしようもないんだ。とにかく、少しでも事態が好転するなら！」

「分かったよ……。じゃあ、調べた限りのことを、君に伝えよう」「ありがとう」

「多分君も認識していると思うが、あのおまじない、短い期間で随分内容が変質しているようだね」

「やっぱり」

「一年ほど前は、桜が満開の季節でないと駄目、という制約があったはずだ。知っているかね」

「それは、俺も聞いたことがある」

病室での神楽坂との会話を思い出して、胸がずきりとした。

「三年の先輩にその話を聞く機会があつてね。その人が一年生の頃には、願いをかけるのは日が沈んだ後でないとダメ、という別の制約があつたらしい」

「そうか。そうすると、それが正式なやり方なんだな？」

「それも違う。違うと思う。わたしは興味があつて、この間過去十年のこの学校で編まれた卒業文集を読み込んだことがあつたんだがね」

「曾倉君、そんなことまでしてるのか」

「ああ、過去の人が考えたことにふれるのは、それだけで面白い体験だからね。それで、ある女子生徒が書いた作文にね、このおまじ

ないのことが書かれていたんだ。五年前の卒業生かな？」

「何でそんなことを卒業文集に書いたんだ？」

「何でも、希望の大学に合格しますようと、桜に願いをかけたらしいんだ。そうしたら、本当に合格した。偶然かも知れないけれど、桜の木に感謝したい、とね」

「おまじないの方法も、その文集に書かれているのか？」

「書いてあった。それによれば、だ。桜が満開でかつ、満月の夜中十二時、その桜に向かって一心に祈るのだそうだ。それで、願いが叶う、とね。桜の木の根元に血を垂らすなどという儀式は書かれていなかったが。まあ、先生も読む文集だから、あまり血なまぐさいことは書けなかったのかも知れないな。そして、それ以上、わたしはさかのぼれていない」

「じゃあ、それが正式なやり方なんだな」

「正式かどうか、わたしは知らない。だが、知りうる限り一番古いやり方だろう」

「そうか、ありがとう」

「いいや。これですんだかね」

「助かったよ」

「それは良かった。では」

「じゃあね」

五十嵐はため息をついて、携帯を机においた。そして、しばらく項垂れていたが、再び携帯を手にとると、月の満ち欠けの情報を検索した。

ソメイヨシノが満開になるのが三月の終わりから四月の頭。その時期で、月が満月になるのは？　すぐに結果が出力される。三月三十一日、明後日だ。

五十嵐はその時点で決心していた。

そして三十一日、夜。五十嵐は学校の校庭に向かった。

天候は快晴、空には期待通りの満月と、名前を知らない星々が輝

いていた。

校門を乗り越え、侵入。十一時五十分、桜の木の前に立つ。腕時計を見、その時が来るのを待つ。十一時五十九分、カバンの中に入れたナイフを取り出し、右の人差し指を傷つける。溢れ出す血を、桜の木の根元に垂らす。一滴、二滴、三滴。

そして時計の針は十二時をさした。

「たのむ。桜の精だか、神だか。神楽坂の病気を治してくれ。部活のメンバーと一緒に、又油絵を描けるように……。俺と、いろんなところに旅行に行ったり、もっと楽しんで……」

五十嵐はぎゅっと目をつむり、血がしたたり落ちるのも構わず手を固く握りしめた。

だが、神楽坂の病気が治ることはなかった。

彼女は、春休みが開けるのを待たず、死んだ。

新学年の初日、校庭で行われた始業式も終わり、先生も生徒も校舎に戻りはじめていた。だが、五十嵐だけは皆とは別の方向へと向かった。

五十嵐は、すでに若葉を芽吹かせている桜の木を蹴飛ばした。何度も何度も、思い切り。ぱらぱらと、しおれた花や萼が落ちてくる。「願い、叶わなかったじゃねーかよ!」

学校中に響き渡る大きな声。先生が訝しんで引き返してくる。

五十嵐は、そんな周りのことなど気にせずに、泣き崩れた。

『その子にあたらないで、五十嵐君』

はつきりと、神楽坂の声が聞こえた。

五十嵐は、涙でにじんだ目で、辺りの景色を見た。

全てが異質なものに映ったのは、目が涙でにじんでいたからではなかった。

空が、プラネタリウムの様にドーム型に変形している。まるで真

つ平らな地面にお椀を伏せた様な感じだ。

そして、遠近法が狂っていた。高さを持つ全ての物体が、凹面鏡に映った像のごとく曲線を描いてドームの中心へと収斂されていくのだ。遠くに見える人の姿も皆歪んでいる。

色も、狂っていた。全てが白黒だ、という言葉が一番近いのだが、色がないわけではない。一度色覚を全部奪われて、改めて別の生き物の色覚を植え付けられたような感覚。

さらに、自分の身体。まるでゴッホが描いた樹木のようにグニャグニャの姿をしていた。

五十嵐の視線は、自然、全てが集約するドームの中心へと向かう。そこには、幼い頃に見たあの糸くずが、中央に目玉を戴いて、全てを見下ろしていた。ああ、やっぱり目玉、あるじゃないか。間違いはなかったんだ……。

『五十嵐君、聞こえている？』

『ああ、神楽坂か。どこにいるんだ、お前？』

『ここよ』

校庭の地面から、一本の桜の木が押し出されるように生えてきた。樹齢三百年はありそうな、太い幹。

『お前』

『言っただでしょ。前世は桜の木だって。もう、とっくに切り倒されちゃってるけど……。じつは、人間の方が、仮の姿』

『本当なのか？　じゃあ、今も生きて？』

『五十嵐君が言う意味じゃあ、もう生きていないわ。ただ、新しい桜の種子に宿るのを、待っているだけ。今はその間』

『そうか。良かった。ただ、死んだんじゃないかって、本当に良かった』

自分の目が今どんな形をしているのか分からなかったが、そこから止めどなく涙が流れ落ちるのを感じた。

『だから、その桜の木に八つ当たりするのはよして。その子は、わたしの子孫なのよ』

『……、そうか、すまない。神楽坂、お前何年前の桜の木なんだ？
『んー、切り倒されたのは三十年ぐらい前だったかな？ 何年生き
たかは、忘れた』

『前世は、全ての生き物にあるのか。俺にも』

『多分ね。ただ、自分の前世がなんだったかって自覚している存在
はほとんどいないけれど』

『そうか』

『だから、悲しまないで』

『ああ、もう悲しまない。ところで、気になるんだが、あの天空に
浮かぶ目玉はなんなんだ？』

『あれは、観測者』

『観測者？』

『この世界は、ある実験者の部屋にある、一つのビーカーに過ぎな
い。わたし達はその中にすむ微生物。あの目は、そのビーカーを観
察している目』

『そうなのか。俺は小さい頃、あれと同じものを見たことがある』

『そう。ふつう、人間のように高度な意識を持っているものには、
あれは見えない。細菌や、植物ははつきりとその存在を感知してい
るけど、その存在が何を意味するのか理解できる知性を持たない。

あれを認識できるのは、わたしのように、前世が植物だったことを
憶えている現在の知性体だけ』

『俺にも、わずかだが見えていたのか……』

『そう、小さい頃に見て、今も見ていると言うことは、五十嵐君に
も、前世が植物だったという記憶が微かにあるのかも知れない』

『……なんだか、壮大だな。俺のちっぽけな感情なんてどうでも良
くなっちまった』

『いいえ。あなたの感情はちっぽけなものじゃない。あなたは、こ
れからもあなたを生きて』

『そうか』

『さあ、じゃあわたしはもう消えるわ。本来、これは人間には見せ

てはいけない光景なのだから……』

『ま、まってくれ』

だが、五十嵐の呼び止めを無視するかのように、世界は急速に、いつものものへと戻っていった。

「おい、五十嵐君。どうしたのかね」

桜の木の下でうずくまった五十嵐に声をかけたのは、曾倉だった。

「大丈夫か」

「ああ、大丈夫だよ」

五十嵐はよろめきながら立ち上がる。

「服が涙でびしょ濡れじゃないか」

「問題ない」

五十嵐は笑顔で答えた。

「桜の木を蹴飛ばしていたようだが、願い、叶わなかったのかね？」

「ああ、ダメだった」

「残念だな」

「そうでもないさ」

先ほど見た光景は、現実なのか、幻なのか。少なくとも、俺にとっては本当だと思うことにした。

そして、大空の果ての果てを睨みつける。

この世界を冷徹に観測している何者か。覚悟しておけ。

人類は、いつかお前のつくった檻を脱出する日が来るぞ。それをするのが、俺ではないとしても。

（後書き）

テーマが一本に絞れませんでした。実はある小説から話の骨組みを盗んできたんですが、それが裏目に出たか。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2554/>

瞳、桜、愛

2010年10月8日15時07分発行